

資料

学生の意欲を引き出す臨地実習の取り組み

-鷹栖町における公衆栄養学分野の臨地実習の取り組み-

手嶋哲子・佐美 靖・田中律子・安田直美

Practical Field Training Draws the University Student's Volition

-Training in the Community Nutrition Field in Takasu Town-

TEJIMA Tetsuko, TAKUMI Yasushi, TANAKA Ritsuko and YASUDA Naomi

緒言

北海道文教大学人間科学部健康栄養学科においては、臨地実習を4年次に設定している。本学では、給食経営管理論分野の臨地実習を2週間（2単位）、臨床栄養学分野の臨地実習を1週間（1単位）、公衆栄養学分野の臨地実習を1週間（1単位）、計4週間の臨地実習を必修と設定している。

平成18年度は平成15年4月に設置された健康栄養学科1期生が4年次となり、管理栄養士養成においてはじめての臨地実習の取り組みであった。平成14年の栄養士法改正にともなう新カリキュラムでは、「学内で修得する知識・技術を栄養管理の実践場面に適用し、理論と実践を結びつけて理解すること」をねらいに「臨地実習」の充実を図り、事前・事後教育の重要性が示されている¹⁾。

また、日本栄養士会で編集した「臨地・校外実習の実際」において、「臨床栄養学」「給食経営管理論」の臨地実習は体験を重視した実習内容を示しているのに対し、「公衆栄養学」では、保健所および市町村保健センターの果たす役割や業務を理解することに重点を置き、業務説明、事業見学が中心となる実習内容が示されている¹⁾。特に、都道府県立保健所では、地域保健法で示される業務内容から、見学・参加できる事業に限られる他、学生が健康教育実習に取り組むことは困難である。北海道の本学以外の管理栄養士養成校においては、道および政令市の保健所が受け入れの主体であり、保健所との連携により1～2日程度市町村保健事業の見学等が組み込まれているのが実態であり、市町村での臨地実習受け入れはごく少数にとどまっている。

本学において、公衆栄養学分野の臨地実習

は、上記の3種の臨地実習のうち最後に取り組む実習であり、学生にとって管理栄養士としての既習の知識を統合させるための実習と考えている。また、学科の教育理念の一つである「もてなしの心」を具現化できる場と位置づけた実習でもある。したがって、公衆栄養学分野の臨地実習では、実習地域の保健事業に学生が参加し住民と交流することにより、実習の目的を達成し、コミュニケーション能力を養うことにつながると考える。

実習プログラム検討において、先行事例の確認のため「臨地実習・公衆栄養学」をキーワードに文献検索をおこなった結果1件該当したが、市町村の保健事業と連携した内容の報告は見られなかった。したがって、管理栄養士養成校における公衆栄養学分野の実習プログラムは、「臨地・校外実習の実際—改正栄養士法の施行にあたって—」¹⁾に示されている内容に準拠して実施されていると思われる。

本学は、北海道の他の管理栄養士養成校に比べ養成人数が多く、市町村での実習受け入れを積極的に進めること、および学生の受け入れが初めての施設に対する大学としてのサポート体制を整えることが不可欠であった。本稿では、北海道上川管内鷹栖町において24名の学生が保健事業に参加し地域住民との交流を中心に組み込んだ実習内容について、他施設での実習との比較を含めた評価および今後の課題について検討したので報告する。

方 法

平成18年度の臨地実習の対象学生は96名で、実習施設別学生人数の内訳は表1の通り、市町村で実習を行った学生が55名(57.3%)となっている。9市町村のうち7市町村は実習の受け入れは初めてであった。

1. 公衆栄養学分野の臨地実習プログラム

本学では、給食経営管理論分野・臨床栄養学分野の臨地実習が終了した2カ月以降に公衆栄養学分野の臨地実習の日程を設定している。教育体制は事前学習、現地での実習、事後学習の3部構成とし、流れは次の通りである。

実習施設との事前打合わせは、担当教員が訪問し実習指導担当者と実習期間・事業内容・注意事項などについて確認を行った。学生は原則として実習1ヶ月ほど前に施設を訪問し課題等の打合わせを行うこととしたが、実習施設が本学から遠距離の場合で学生の事前訪問が困難な施設に対しては「臨地実習指導担当者打ち合わせ会議」を学内で開催し実習目的・注意事項などについて確認を行った後、学生との打ち合わせを実施した。

実習施設には、本学の実習要項を理解してもらうため学生と同様に臨地実習の手順と方法を示した「臨地実習Ⅲ(公衆栄養学)学生ポリシー&プロシージャーハンドブック」³⁾と「事前学習ノート」⁴⁾の配布を行った。

1) 事前学習

(1) 学内オリエンテーション

①公衆栄養学分野の臨地実習全体オリエンテーション

「臨地実習Ⅲ(公衆栄養学)学生ポリシー&プロシージャーハンドブック」³⁾に沿って実習の目的・目標・内容・留意点・各学生の実習施設について説明を行う。

②実習施設毎の学内オリエンテーション

表1 実習学生数および実習施設数

区分	県・道立 保健所	政令市 保健所	市町村
施設数	5	3	9
実習人数	30	11	55

実習プログラム、自己学習の内容の説明、実習地域の保健事業計画・栄養士活動計画・市(町村)勢要覧等の資料の貸し出し、宿泊と交通機関の説明を行う。

(2) 事前学習

「事前学習ノート」⁴⁾を基本に実習地域の特徴、地域保健・地域栄養活動の把握と実習内容に関する学習(保健事業の目的・内容・関係法規・疾病・発育発達等)を行う。

実習施設毎に配布した資料をもとに地域の概況の理解を深め、グループ内での共通理解を図る。実習プログラムに沿って栄養教育の準備と地区活動の展開に必要な知識の復習を行う。

2) 保健所または市町村での実習

実習プログラムは、実習指導者と担当教員の打ち合わせにより実習指導者が作成する。次に示す項目が盛り込まれた内容となっている。

(1) 実習施設オリエンテーション

行政の仕組みとサービス、その中での保健活動の位置づけを学ぶ。その保健事業が地域の健康問題とどのように関係しているのか、どのようなプロセスを経て現在に至っているのかという点についても学習する³⁾。

(2) 各種事業の見学または、実施

実習期間中に開催される保健事業の見学または、健康・栄養教育を実施する³⁾。

(3) フィールドワーク

学生が自分たちでテーマを決め、主体的に地域に出向き、地域の特性を捉える実習を行う³⁾。

(4) カンファレンス

①ミニカンファレンス(毎日):その日実習で体験した内容から学びや疑問を表現し、他の学生と意見交換を行う³⁾。

②カンファレンス(実習最終日):学生が体験した内容とその内容から学んだこと・感じたことを表現し、他の学生と学びを共有する。参加者は、学生、実習指導者、その他の関係

者、担当教員とする³⁾。

3) 事後学習

(1) 実習報告書の作成

実習地域の概況・栄養士活動の特性・実習内容について、実習施設毎にまとめ実習報告書を作成し、実習指導者、関係機関、担当教員に提出する。

(2) 学内での実習報告会の実施

実習施設毎に学生が実習内容を報告し、地域の特性や栄養士活動の特徴について学んだことを発表する。学生は、配布資料の作成とプレゼンテーションソフトを用いた発表を行う。参加者は学生、関係者、担当教員とする。

2.調査方法

1) 調査方法

(1) アンケートによる調査

調査対象者は北海道文教大学人間科学部健康栄養学科4年に在学し公衆栄養学分野の臨地実習を行った96名で、有効回答者数は83名であった。

調査は平成18年12月質問紙による選択肢(一部記述式)で実施した。

調査内容は、対象者の実習先、実習の満足度、実習で取り組みたかった内容、公衆栄養学以外の分野で重要と感じた分野、栄養教育の実施、栄養教育実施で参考となった授業内容、公衆栄養学の授業に対する要望、公衆栄養学以外の教科への要望、公衆栄養学分野の臨地実習の必要性など9項目を設定した(資料1)。また、満足度は「非常に満足した。」を5点、「まったく満足しなかった。」を1点と配点し評価を行った。

(2) 評価表による調査

臨地実習終了時に、学生と実習指導担当者が評価を行った。学生は「自己評価表」(資料2)を用いて、実習目標毎に各項目4段階で評価を

行った。また、実習指導者は、学生の臨地実習に臨む態度について、「公衆栄養学実習 証明書及び出席・評価表」(資料3)を用いて、評価項目毎に3段階で評価を行った。

(3) 統計解析

実習における参加意欲と満足度について保健所実習生と鷹栖町実習生を比較し、その差異についてマン・ホイットニ検定により解析した。統計的有意水準を5%とした。

統計ソフトはエクセル用アドインソフト「Statcel 2」を用いた²⁾。

結果と考察

1. 鷹栖町の実習日程と内容

市町村での実習学生のうち24名は鷹栖町で臨地実習を行った。

実習期間は、1クールが平成18年8月28日(月)～9月1日(金)、2クールが平成18年9月4日(月)～9月8日(金)の各5日間であった。

実習受け入れ施設は、保健センターと鷹栖町中央地区の公衆栄養活動と高齢者の配食サービスを実施している柏の里デイセンター(知的障害者居宅介護事務所)であった。各施設に1回6名2回の受け入れとなり、3名1グループで実習日程に取り組むこととした。いずれの施設も、管理栄養士臨地実習の受け入れは初めてであり、人数も多いためサポートとして教員1名と助手1名が保健センターに常駐することとした。

学生の宿泊は、鷹栖町内に旅館やホテルなどの宿泊施設がないため柏の里デイセンターが運営する地域交流施設「あじさい」(図1)を利用し実習期間中12名の学生が自炊による共同生活により対応した。

1) 鷹栖町の概要

人口 約7,600人：年少人口(1～14歳)が減少している反面、老年人口(65歳以上)は年々増加傾向を示している。平成18年3月31日現在の高齢化率は25.2%である。

世帯数 約2,900戸：核家族がすすみ高齢者の一人暮らしや高齢者夫婦のみの世帯が増加している。

気象は内陸的気候を特徴とし、気温は7月下旬から8月上旬までが最も暑い時期となり、最高気温が30度を超える日がある。真冬の寒い日はマイナス30度を超える日があり、寒暖の差が60度を超える。米作地帯として理想的な農地が多く存在する北海道有数の米作地帯である。

地域保健福祉事業に関しては、昭和40年代より積極的に取り組み昭和50～60年代には、全国的に高い評価を受けた町である。

2) 臨地実習日程と内容

(1) 臨地実習プログラム

鷹栖町での実習日程は表2の通りである。1日目と5日目の総合カンファレンスは全員参加により行った。2日目以降は、グループで設定したテーマに該当する施設に分かれ実習を行った。保健センターでは、母子対策・成人対策に関する事業をA・Bグループ、柏の里デイセンターでは、老人対策・障害者施策に関する事業をC・Dグループが行なった。



図1 地域交流施設 あじさい

表2 鷹栖町臨地実習日程表

月・日	Aグループ	Bグループ	Cグループ	Dグループ
1日目 (月)	11:00～12:00・実習の挨拶 ・施設見学 ----- 13:00～14:00・保健所栄養士業務について・・・道立上川保健所専門員 14:00～15:00・鷹栖町の保健活動について・・・鷹栖町保健師 15:00～16:00・市町村栄養士業務について・・・鷹栖町栄養士 16:00～17:00・ミニカンファレンス ・実習のまとめ			
2日目 (火)	8:30～12:00 ・子育て支援センター での栄養教育実施	8:30～10:00 ・実習課題の検討 10:00～12:00 ・子育て支援センター	8:30～12:00 ・オリエンテーション ・柏の里デイセンター及び関連施設の見学	
	13:00～16:00 ・実習課題の検討 16:00～17:00 ・実習のまとめ、ミニカンファレンス		13:00～17:30 ・配食弁当の製作 ・弁当配達	13:00～17:30 ・柏の里デイセンター 活動参加
3日目 (水)	8:30～12:00 ・実習課題の検討	8:30～12:00 ・実習課題の検討	8:30～12:00 ・ふれあいランチの打ち合わせ	
	13:00～16:00・保健事業見学 16:00～17:00・実習のまとめ ・ミニカンファレンス		13:00～17:30 ・実習課題の検討 ・アンケート回収	13:00～17:30 ・配食弁当の製作 ・弁当配達
4日目 (木)	8:30～11:30・実習課題の検討 11:30～13:00・鷹栖小学校昼食交流		8:30～12:00 ・ふれあいランチ	
	13:30～15:00・学校給食センターの栄養士業務と児童の食生活の現状…鷹栖町学校給食センター栄養士 16:00～17:00・ミニカンファレンス		13:00～17:30 ・健康、栄養教育の実施 ・実習のまとめ、ミニカンファレンス	
	18:00～20:00 男性料理グループ	調理実習指導担当	18:00～20:00 男性料理グループ例会参加	
5日目 (金)	8:30～12:00 北野保育所栄養教育	8:30～12:00 鷹栖保育所栄養教育	8:30～12:00 ・柏の里デイセンター 活動参加	8:30～12:00 ・アンケート回収 ・アンケート集計
	13:00～15:00・実習課題の検討とまとめ 15:00～16:00・総合カンファレンス 16:00～17:00・実習のまとめ ・実習修了の挨拶			

事前学習では、グループ毎に配布した資料(鷹栖町勢要覧・統計資料・総合振興計画・老人保健福祉計画・次世代育成支援行動計画・鷹栖町健康管理活動20年のあゆみ・平成17年度栄養士業務分析・平成18年度栄養士業務計画)とインターネット検索をもとに地域の概況の理解を深め実習テーマの設定と実習で取り組みたい内容の検討を行った。

テーマ設定と取り組み内容をグループ内でまとめた後、担当教員から2～3回程度の指導を受け実習施設の決定を行った。実習施設決定後は、各施設の実習プログラムに沿って栄養教育の準備と必要な知識の復習を行った。今回、保健センター実習学生は各グループ2回の栄養教育の実施となり、柏の里デイセンター実習学生は各グループとも配食弁当に関わる一連の業務と健康・栄養教育を1回実施となった。

(2) 現地での実習

①保健センターでの実習内容

●子育て支援センター

乳幼児が心身ともに豊かに成長し、両親が子育てを楽しみ、充実した時間を過ごせることを目的に運営されている施設である。一般開放、子育て相談、赤ちゃんひろば、一時預かりなどの事業を行っている。「赤ちゃんひろば」は、1歳6カ月までの乳幼児と母親の教室で、母親同士の交流の場としても利用されている。



図2 子育て支援センターでの栄養教育
1クールAグループ

1クールAグループは、「親子で離乳食」の講話を実施した(図2)。両親の食事から離乳食への展開について学生作製のポスターを使って説明を行った。



図3 子育て支援センターでの栄養教育
2クールAグループ

2クールAグループは「手作りおやつを食べよう！」(図3)をテーマに市販のお菓子の説明とさつま芋を使ったお団子を親子で調理を行った。おやつに関するパンフレットを作成し参加者に説明し配布を行った。栄養教育を担当しなかったBグループは、見学とサポートのため参加した。

●保育所

鷹栖町には2地区に保育園が設置されている。入園数は鷹栖保育園約100名、北野保育園約60名となっている。学生は、栄養教育の実施と園児との交流(一緒に遊び、昼食を共にする。)を目的に実習を行った。

1クールAグループは「おやつを作ろう！」(図4)をテーマに鷹栖保育園年長児と地場産



図4 鷹栖保育園栄養教育

のトマトジュースを使ったゼリーの調理を行った。おやつ時間に学生も一緒に試食を行った。



図5 北野保育園栄養教育（折り紙）

Bグループは、「折り紙で野菜を作ろう！」（図5）をテーマに北野保育園年長児に野菜に関心を持つきっかけ作りとして折り紙を園児と一緒にいき、折り方を説明したアルバムを作成し保育園に寄贈した。折り紙は、給食経営管理実習の指導媒体作成で実習した内容を活用している。



図6 鷹栖保育園栄養教育（紙芝居）



図7 鷹栖保育園昼食風景

2クールAグループは紙芝居「おやつ食べ過ぎないで」を鷹栖保育園年長児に行った。Bグループは、紙芝居「ミュートランスものがたり」を鷹栖保育園園児全員に対して行った（図6）。

栄養教育終了後は園児と昼食を一緒に摂り交流を行った（図7.8）。



図8 北野保育園昼食風景

●小学校昼食交流

児童の食生活の状況を理解するため鷹栖小学校で昼食交流を実施した（図9）。児童と一緒に昼食を摂り児童の食べている様子の観察と食生活に関する情報収集、情報の提供を目的とした。学生1名が1教室に入り児童と交流を行った。



図9 鷹栖小学校昼食風景

2クールA、Bグループは、「食器の置き方」の情報提供を行った（図10）。両クールとも小学校での昼食交流後に、学校給食センター栄養士から、「学校給食センターの栄養士業務と児

の献立作成、弁当の製作、配達、アンケートの実施をグループ単位で取り組んだ。献立は、指導担当者とFAXなどを利用して打ち合わせを行い実習前に作成した。アンケートも事前に作成し、実習中に指導担当者の指導を受けた。配食弁当の製作は、調理師が調理したものを柏の里デイセンターの利用者でもあるHさんの指導により盛り付けを実施した(図13)。出来上がった弁当をアンケートとともに利用者1件ずつ学生が手渡し、後日学生がアンケートを回収・集計を行った。

●ふれあいランチ

柏の里デイセンターの事業として独居高齢者を対象に「ふれあいランチ」を中央地区公民館で開催。中央地区の老人会ボランティアと前日に献立の打ち合わせを行い、当日ボランティアと学生で調理と会場準備を行った(図14)。献



図14 ふれあいランチ準備風景



図15 ふれあいランチ

立は、地域で採れた野菜を中心にボランティアと学生の協議により決定した。昼食時に、独居高齢者と会食交流(図15)を行った。

●健康・栄養教育

ふれあいランチ終了後、参加者を対象に健康・栄養教育を実施した。各クールとも、Cグループが食事・栄養に関する講話、Dグループが体操・運動に関する実技を行うこととなった。1クールは「減塩について」リーフレットを作成し講話を行った(図16)。「塩分チェック」を組み込んで栄養教育の展開を行った。



図16 1クールCグループ栄養教育

2クールは「転倒予防健康な体を維持する。」について講話を行った。(図17-2)。学生が作成した、たんぱく質・カルシウムのポスター(図17-1)とパンフレットを活用して行った。



図17-1 カルシウムのポスター



図17-2 2クールCグループ栄養教育

Cグループの栄養教育の後、Dグループが運動指導を実施した。1クールは、「高齢者のウォーキング教室」として計画した。「歩くことの重要性・注意点」を講義後(図18-1)、準備運動、転倒予防体操(図18-2)、ヒモ歩き、ウォーキングシート(図18-3)を行った。運動実技中のサポート方法は、Cグループと事前打ち合わせにより、参加者の転倒防止と無理をしないように全員が注意を払いながら実施した。



図18-1 健康教育



図18-2 転倒予防体操



図18-3 ウォーキングシート

2クールは、「チャレンジ体操でみんな楽しく健康づくり！」をテーマに実施した。

リーフレットを配布して、運動の効果やサイジゴムなど筋肉を鍛える器具の紹介を行った後、ストレッチ、みんなの体操(図19-1)、ボール遊び(図19-2、19-3)を行った。参加者の身体状況により長時間の立位が困難な人には、椅子に座ったままで行う方法を採用した。

ウォーキング、体操等は健康体力科学実習で



図19-1 みんなの体操



図19-2 ボール遊び

実習した内容を活用している。



図19-3 円形サッカー

2. 臨地実習と教科の関連

公衆栄養学分野の臨地実習において、学生が重要と感じた教科についてアンケート調査を行った結果が図20である。公衆栄養学以外で重要と感じた分野の数は、全体で 2.71 ± 1.46 、全ての8分野と返答した学生は2名であった。分野別では、栄養教育論60人（71.4%）、応用栄養学58人（69.0%）が共通して高い。しかし、他の分野でも重要性を示している学生もいることから、実習プログラム内容によって重要と感じる分野が異なることが推察される。

栄養教育の実施や媒体作成で参考となった授業内容として、栄養教育論の、「プレゼンテーションの方法」「栄養教育の展開の方法」「リ-

フレットの作成」、応用栄養学の「ライフステージ別の身体的特徴と栄養に関すること」をあげていた。

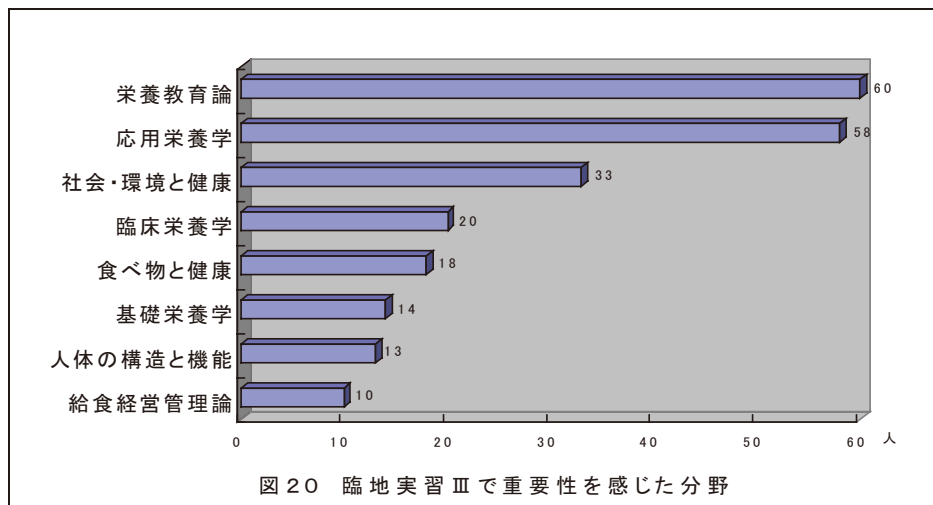
媒体作成では、給食経営管理論で行う「ポスター」「紙芝居」「折り紙」は鷹栖町以外の施設での実習においても活用されていた。また、給食経営管理論が、「料理教室を行う時に効率よく行動する参考になった。」との回答や、給食経営管理分野での臨地実習の経験が栄養教育を行う参考になったとの回答も得ている。

健康教育に運動を取り入れたグループは、授業のみでは指導を行うのは困難であり、教科担当教員からアドバイスを受けることや、住民に対する指導状況を見学することにより実習で生かすことが出来たと感じている。

このことから、実習に活かせる授業内容と実習に向けて実習担当教員以外のサポート体制が整備されていることが重要であると考えられる。

3. 臨地実習における学生の積極性

学生の臨地実習に対する取り組みの積極性について、学生の自己評価と指導担当者の評価から検討した結果が図21-1.2.3である。学生の自己評価Aは、全体で60名（62.5%）、都道府県立保健所実習生（以下 保健所）で13名



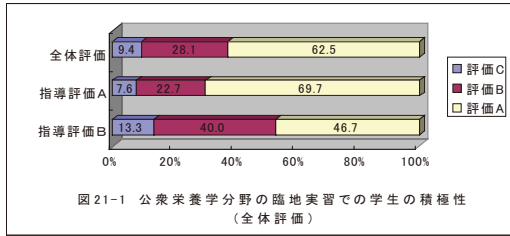


図21-1 公衆栄養学分野の臨地実習での学生の積極性 (全体評価)

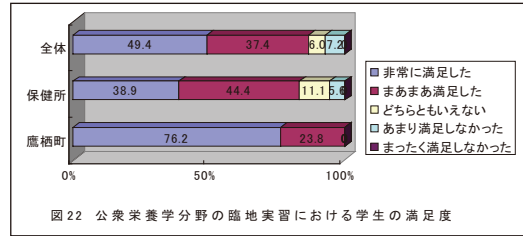


図22 公衆栄養学分野の臨地実習における学生の満足度

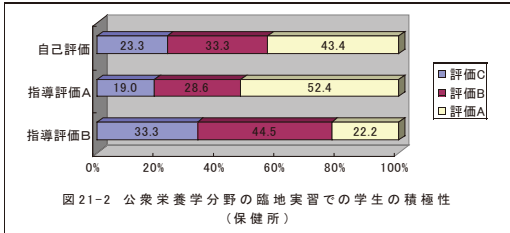


図21-2 公衆栄養学分野の臨地実習での学生の積極性 (保健所)

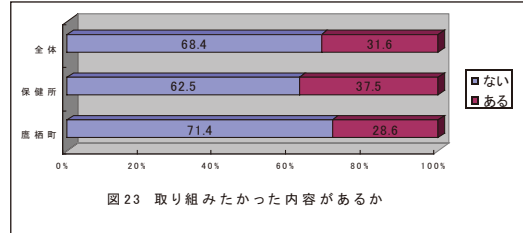


図23 取り組みたかった内容があるか

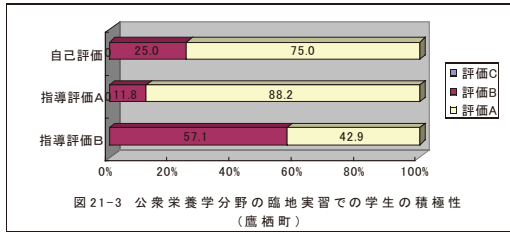


図21-3 公衆栄養学分野の臨地実習での学生の積極性 (鷹栖町)

(43.4%)、鷹栖町実習学生は18名(75%)であった。

また、実習生と実習指導担当者の評価には差異が見られたので、実習指導者の評価も合わせて検討を行った。指導担当者のA評価は、全体で70名(72.9%)、保健所21名(70%)、鷹栖町17名(70.8%)である。指導担当者評価Aのなかで自己評価Aは、全体で69.7%、保健所で52.4%、鷹栖町で88.2%となり、鷹栖町が最も高かった。

評価点数の平均値は保健所4.20、鷹栖町4.75である。保健所と鷹栖町の評価点数の差をマン・ホイットニ検定を用いて検定した結果では、同順位補正Z値2.656、同順位補正P値0.008となり帰無仮説は棄却され、有意差が認められた。

このように実習プログラムによる取り組む姿勢の違いを示しているが、鷹栖町の実習では、直接町民と接する機会が多いことや自分達で考え行動する場面が多く設定されていることが強

く影響しており、学習効果の高い充実した実習となったと推察する。

4. 臨地実習の満足度

実習に対する満足度をアンケートにより調査した結果(図22)によると、「大変満足した」は、全体で49.2%、保健所は38.9%、鷹栖町は76.2%となっている。「まあまあ満足した」を加えると、全体で86.8%、保健所で83.3%、鷹栖町は100%となり、鷹栖町が最も高かった。

また、満足度評価点数の平均値は保健所4.17、鷹栖町4.76である。保健所と鷹栖町の満足度評価点数の差をマン・ホイットニ検定を用いて検定した結果では、同順位補正Z値2.524、同順位補正P値0.012となり帰無仮説は棄却され、有意差が認められた。このことから、鷹栖町の実習では、学生の積極性を引き出し満足度の高い実習プログラムであったことを示している。

実習で「今回取り組みなかったが取り組みたかった内容がある者」は、全体31.6%、保健所37.5%、鷹栖町28.6%である(図23)。保健所では、「栄養教育の実施」「住民と接する内容」を希望としてあげていることから、事業見学よりも業務を体験できる実習プログラムを望んでいることが推察される。

また、鷹栖町では業務を体験できる機会が多

く組まれていたが、「実習施設を入れ替えての実習」を希望としてあげ実習に対する強い意欲を示していた。これは、鷹栖町保健センター実習生が、「柏の里グループが、たくましくなっていく姿を見て刺激を受けた。」と実習総括で述べているように、宿舎での意見交換により学ぶことが多かったためと推察される。

公衆栄養学分野の臨地実習のまとめと今後の課題

北海道文教大学で、平成18年度1期生の公衆栄養学分野の臨地実習を市町村を中心に実施した。臨地実習初年度であったが、実習受け入れ施設の協力により従来の保健所中心の実習プログラムをベースに、各施設で特徴ある実習に取り組むことができた。

今回の鷹栖町での実習は、住民と接する機会が多かった事と、多人数で実習地へ行き少数グループで行動しながら他のグループの行動を観察できたことが大きな特徴であった。このことから、学生は事前学習および現地での実習において積極的な取り組みとなり、満足感の大きな実習となったと推察する。

また、学生の要望に対し、夏休み期間であるにも関わらず実習外の教科担当教員が熱心に指導したことも、学生の実習に対する姿勢に影響を与えていると考える。

鷹栖町で実習した学生は、「住民から多くのことを学んだ。」「コミュニケーションの大切さを感じた。」「管理栄養士は、人々が望む生活を支援することが役割だと感じた。」「障害は、個性であることを理解できた。」「人生の糧となる実習であった。」と実習総括の中で述べている。学生は、知識だけではなく、住民を支援する姿勢も学んでいると推察される。

今日、子どもへの食育の高まり、生活習慣病予防のための一次予防の重視など、地域に根ざした食生活改善活動が求められている。このよ

うな社会ニーズに応えられる、管理栄養士を養成するためにも、地域社会で実際に生活している人々に接し、対象の健康状態や食生活について理解を深められる臨地実習プログラム内容について、今後も検討を重ねて行きたいと考えている。

また、公衆栄養学分野の臨地実習の受け入れ先である保健所の統合が進んでいることや業務内容から市町村での実習を拡大していくことが急務となっている。しかし、臨地実習の受け入れを経験している町村は少なく、1名配置の施設が多いので必要に応じて大学がサポートできる体制の検討も必要と考える。

謝 辞

本稿をまとめるにあたり、鷹栖町役場保健福祉課職員、柏の里デイセンターの職員、三味の会会員、味三味の会会員、鷹栖町の住民の皆様にご協力をお願いしました。ここに記して厚く感謝申し上げます。

参考文献

- 1) (社) 日本栄養士会・(社) 全国栄養士養成協会編 (2002) : 臨地・校外実習の実際-改正栄養士法の施行にあたって
- 2) 柳井久江 (2004) : 4Stepsエクセル統計【第2版】、(有) オーエムエス出版
- 3) 手嶋哲子 (2006) : 北海道文教大学人間科学部健康栄養学科臨地実習Ⅲ (公衆栄養学) 学生ポリシー&プロシージャーハンドブック
- 4) 手嶋哲子 (2006) : 北海道文教大学人間科学部健康栄養学科臨地実習Ⅲ (公衆栄養学) 事前学習ノート

(2007年1月25日受稿)

8. 公衆栄養学以外の教科で、取り組んで欲しいと感じた内容はありますか。

①ない

②ある

具体的に内容を記入してください

9. 臨地実習Ⅲは管理栄養士教育で必要だと思いますか。

①必要だと思う。 ②必要とは思わない。 ③どちらともいえない。

10. 上記の質問で「①必要だと思う。」と答えた人は臨地実習Ⅲの適切と思う実習期間・実習先は下記のどれですか。

実習期間： ①1週間 ②2週間 ③3週間 ④4週間

実習先： ①道・県立保健所 ②政令市の保健所 ③市町村 ④鷹栖町

11. 臨地実習Ⅲに対する感想などありましたら記入ください。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

ご協力ありがとうございました。

公衆栄養学臨地実習評価表 (学生用)

学籍番号 _____

実習施設 _____

学生氏名 _____

評 価 内 容		評価	自己評価の理由
目標1 (10点)	地域で暮らす人々は、生活の主体者であることを具体的に述べることができる。		
	健康・栄養問題や課題を、地域の特性や社会背景と関連づけて説明することができる。		
目標2 (15点)	公衆栄養活動の対象は、個人のみではなく地域でもあることを説明できる。		
	主体性を尊重した支援活動の必要性について説明できる。		
	個別・集団・地域への支援を効果的に組み合わせ、どのように支援が行われているかを理解することができた。		
目標3 (10点)	地域の社会資源について理解することができた。		
	関係機関や関係者との調整や連携の実際と必要性について理解することができた。		
実習態度 (15点)	積極的に実習に取り組むことができた。		
	実習指導者への連絡・報告・記録の提出を速やかに行うことができた。		
	実習中の諸注意を守り、学生らしい節度・協調的態度で実習に臨むことができた。		
合 計 点		() 点	

*評価基準

- A : よくできた (5点)
- B : だいたいできた (4点)
- C : あまり良くできなかった (3点)
- D : できなかった (2点)

公衆栄養学実習 証明書及び出席・評価表

施設名			
施設長名	印	実習指導者名	
実習期間 年 月 日 () ~ 年 月 日 () 上記の期間、当所において公衆栄養学実習に従事したことを証明する。 年 月 日 ()			

	実習日 (5日間)	実習時間 (40時間)	実習生氏名			
出席表	月 日	8	印	印	印	印
	月 日	8	印	印	印	印
	月 日	8	印	印	印	印
	月 日	8	印	印	印	印
	月 日	8	印	印	印	印
評価表	時間・規則・指示を守っていた		A・B・C	A・B・C	A・B・C	A・B・C
	身だしなみが実習に適切である		A・B・C	A・B・C	A・B・C	A・B・C
	挨拶・言葉遣いが適切である		A・B・C	A・B・C	A・B・C	A・B・C
	協調性がある		A・B・C	A・B・C	A・B・C	A・B・C
	積極的に実習に取り組んでいた		A・B・C	A・B・C	A・B・C	A・B・C
	仕事に責任を持っていた		A・B・C	A・B・C	A・B・C	A・B・C
	計画性		A・B・C	A・B・C	A・B・C	A・B・C
	表現力		A・B・C	A・B・C	A・B・C	A・B・C
	総合的に評価してお気づきの点がございましたらご記入お願いいたします。					

記入上のお願い

※ 出席表は本人に捺印させてください。

評価表は該当評価に○印をお願いいたします。評価基準は下記のように考えています。

A : 100 ~ 80点 B : 79 ~ 60点 C : 59点以下